



同志社人物誌 (60)

原 田 助

竹 中 正 夫

生いたち

一八六三(文久三)年一月一〇日、父鎌田收、母亀尾の次男として、熊本市坪井町に生れた。のち(一八八二年)に原田林平(熊本県山鹿郡上永郡上永野)の許に養子となり、原田姓を名のようになった。④当時の徴兵令では長男は徴兵を免れることになっており、徴兵をさけて学究をつづけるため形式的に原田家に入った。彼と同時代に同志社で学んだ安部磯雄や岸本能武太なども同様の理由で改姓している。⑤

竹崎茶堂の主宰する私塾日新堂で一八七三

(明治六)年から一八七四(明治七)年にかけて学んだのち、④熊本洋学校においてL・L・ゼーンスの下で研鑽をつんだが、同校が、一八七六(明治九)年に廃校となったので一八七八年に嘉悦氏房が新設した熊本広取英知学校に学び、一八七九年に第一回生として同校を卒業した。⑤この間、一八七八(明治一一)年三月一六日に認めた作文があるが、その題は「成業は勉強ニアリ」というテーマで、幼年ノ時ハ専ラ学業ヲ勉強シ他日必ズ世上ノ公利ヲ計ラザルベカラズ」とのべている。⑥原田助は、一三歳のときに父をなくし、⑦変転の

時代に対処する為、若いときに修業すべきことを、一入自戒していたように思われる。

同志社に学ぶ

一八八〇(明治一三)年に、京都に出て同志社英学校に学んだ。従兄にあたる森田久万人の紹介でD・W・ラーネッドに紹介され、彼の日本語の教師をつとめ、月三円を給料として受取るようになった。同志社において、新島襄をはじめ、宣教師たちや先輩教師たちの指導によってキリスト教についての関心を深くし、同年一〇月二五日の日記につぎのよう

に記している。
午前八時第二公会ニ行ク市原氏説教、助始メテ、基督教ノ真理能ク心ニ徹シ得タリ
翌、一九八一(明治一四)年五月一日、当

時新島宅で開かれていた京都第二公会で洗礼をうけた。当日の説教は、そのころ、同志社女学校の教頭をしていた宮川経輝がなし、新島襄が教会の主意と信仰の箇条を朗読し、ゴードン宣教師が洗礼を授けた。そののち、ラーネッドの司式によって聖餐式がもたれた。原田助とともに当日、洗礼をうけたのは、新島襄の母 富、片桐清治、三宅荒毅、池袋清



1883(明治16)年、同志社在学中後列左端が本人

風、木村経夫の五人であった。この中、片桐清治は水沢の出身で、のちに仙台教会の牧師をつとめた人で、その次男哲と原田助の長女芳子が一九二〇年七月二四日結婚式をあげている。なお、三宅荒穀は、同志社を卒業したのち米国にて神学を修め、天満教会で牧会、伝道にあたり、また、日本基督教伝道会社社

長や大阪基督教青年会会長などをつとめていた。彼は三七歳の若さで、一九〇二年に早逝した。ちなみに、彼の妻となった川本夏子は、原田の妻佐喜子の姉であった。

一八八〇(明治一三)年から一八八四(明治一七)年に及ぶ同志社の生活において原田助が得たものに二つあった。一つはキリスト教の信仰であり、他はすぐれた友人たちであった。

彼の同級生には、第一期生の人びとに遜色のない人材が多くあった。堀貞一、辻密太郎、杉田潮、上原方立、綱島佳吉、井手義久のようにすぐれた牧師となった人たち、大西祝、村上直次郎、亀山昇などのように学界、教育界に貢献した人などがあった。

彼らは、学業に励むとともに、しばしば公開の演説会を開き、また寮の生活を共にしながら、お互いの人格形成をはかった。在学中の彼の日記に、大西祝との興味深い対話がある。彼らは互いに友情が人生においていかに重要であるかを語りあったのちに、一生の事業について話し、つぎに、人間の品性についてつぎのように話しあっている。

大西次デ曰ク余ノ君ニ最モ希望スル所ハ

君少シク moral dignity ヲ養成セヨ、所謂 moral character ナルモノアリテ人云ハズシテ服スルノ徳望ヲ積ムコト甚ダ必要ナリト思フナリ、助曰ク甚ダ然リ(中略)余モ頃日 moral character ナクンバ如何ニ辞アリ弁アルモ其力ナキコトヲ痛感ス云々、嗟今日ハ如何ナル日ゾヤ予ハ一ノ良友ヲ得タリ是レ神ノ誘導ニアラズシテ何ゾヤ。

原田助の歿後、故人を偲んで追悼会がもたとき、平安教会の牧師をしていた山口金作は、「人間の品性は神の最大傑作である。この意味で故人(原田助)の品性を見れば、正に神の栄光を顕はすものとして尊敬を禁じ得ないものがある」とのべている。原田助が、学生時代から品性の向上につとめてきたことをあわせて考えると興味あることばである。

一八八三(明治一六)年一〇月から、同志社に籍をおいたまま、新島の要請によって神戸英和女学校(現神戸女学校)で教鞭をとり、翌年六月同志社英学校余料を卒業した。なお、卒業論文の題は「文学ト宗教ノ関係」であった。



1884(明治17)年、神戸女学院在職中、後列左から二人目原田

教会の指導者として

同志社を卒業したのち、神戸教会の仮牧師となり、一八八五年五月按手札をうけて牧師となった。翌年五月に神戸基督教青年会が結成されたとき推されて初代会長となった。同志社を卒業して間もない青年牧師を会長とし

た神戸の青年会の指導者の慧眼もさることながら、弱冠二三歳の原田にはすでに指導者となる素質が備わっていたものと思われる。

一八八八(明治二一)年より三年間、シカゴ神学校及びイェール大学に学び一八九一年にイェール大学よりB.D.(神学士)の学位を得て帰国し、同年一二月かねてより婚約していた川本佐喜子と神戸において結婚式を挙げた。一八九〇年彼がイェール大学で学んでいたときの日本人留学生の写真があるがそれによると、松方幸次郎、森田久万人、市原盛宏、樺山資英、谷村一佐、湯浅吉郎、重見周吉、原田助などがいたことがわかる。

帰国後、原田は相ついで三つの教会の牧会にあたった。一つは、番町教会(一八九二年〜一八九五年)、二番目は、平安教会(一八九六年〜一八九八年)、三番目は、神戸教会(一八九八年〜一九〇六年)であった。番町教会は、前仕者、金森通倫が新神学に走って辞任し、無牧であったので、堅実な神学思想を外国で学んだ原田を歓迎してつぎのようにのべている。

余輩は今此神学争論の喧しき時に於て、原田氏の如き寛厚にして且堅貞なる信仰を

有する人の番町教会の牧師となれるを喜ぶ、和して而して流れず、中立して而して遍せずとはけだし原田氏の主義とする処ならん^①。

平安教会では、ちょうど二〇周年にあたって原田助牧師を中心に新会堂を建築する気運がすすみ、一八九七年三月に献堂式ならびに二〇周年記念式典を催した。一八九八(明治三一)年六月、原田は平安教会を辞して神戸教会に赴任した。神戸教会は二度目の牧会で会員たちも原田を支持し、原田の国際的な性格が神戸の町とよくあい教会は着実な進展をなした。就任の翌年から『教会月報』を刊行し、教会員相互の交流をはかるようにつとめた。神戸在任中、一九〇〇年には万国共励会々長F.E.クラークを迎えて神戸で日本連合共励会第八回大会を神戸で開催し、同年八月ロンドンで開かれた万国共励会大会に出席、また一九〇五年には中国における共励会大会及び中国教育会大会に出席のため中国に旅行し、朝鮮を訪問して帰国し、一九〇六年には、印度基督教青年会同盟の招きによって元田作之進とともに二月から五月まで印度各地で講演をなした。その記録にみると、「(一)講



1890(明治13)年、米国エール大学日本人留学生

前列左から2人目 松方幸次郎、4人目 森田久万人、5人目 本人、6人目 市原盛宏
後列左から1人目 樺山資英、4人目 谷村一佐、6人目 湯浅吉郎、7人目 重見周吉

演及び諸集会百十回、(二)元田又は原田一人宛の演説回数七十四回、(三)聴衆三万七百三十六名、(四)最大聴衆一千名、(五)訪問都市二十二^⑮とあり、同じアジアにあるキリスト者の交換

としてきわめて大きな反響をよんだことがうかがえる。

原田助は各個教会の有力牧師であつたのみでなく、日本組合基督教会においても、一九〇〇年には、幹事、一九三五年から会長を四期つとめ、また第一〇回組合教会総会議長として、『日本基督伝道会社略史(明治三一年)』を編集し出版している。さらに、組合教会がアメリカン・ボードから独立するにあつたつての問題や、同志社の綱領改正にともなうアメリカ・ボードとの話しあいなどにおいては、原田助が交渉の委員として重要な役割を果している。これは、彼が宣教師たちの信頼を得ていたことを物語っている。

文筆活動

同志社時代の原田助の働きをのべる前に、彼の文筆活動にふれておきたい。

米国から帰って番町教会の牧会にあたりながら、原田は『基督教

新聞』と『六合雑誌』の編集を手伝い、とくに『六合雑誌』には、つぎのような論文を寄稿している。

良心の本源	八五号	M 21・1
信仰箇条の改正に就て		
基督の所謂神の王国	一三五号	M 25・3
基督の所謂神の王国(承前)	一三七号	M 25・5
シュライエルマヘルの性行	一三八号	M 25・6
朱氏神学概論	一四二号	M 25・10
朱氏神学概論(承前)	一四四号	M 25・12
神学界の波瀾及び其帰趨	一四六号	M 26・2
宗教的道德の性質	一五二号	M 26・8
実践道德の中心問題	一五四号	M 26・10
耶穌教駁議を読む(其一)	一五七号	M 27・1
耶穌教駁議を読む(其二)	一五九号	M 27・3
耶穌教駁議を読む(其三)	一六一号	M 27・5

耶穌教駁議を読む(其三)

一六二号 M 27・6

耶穌教駁議を読む(其四)

一六四号 M 27・8

耶穌教駁議を読む(結論)

一六五号 M 27・9

宗教の定義を論ず

一七〇号 M 28・2

宗教と社会の關係

一七五号 M 28・7

社会的基督教の本領

一八一号 M 29・1

近時の基督論に就て

一八九号 M 29・9

基督教の現世論

一九六号 M 30・4

基督教の社会的傾向を論ず

一九八号 M 30・6

このうち「良心の本源」は渡米留学前のものであるが、それ以外のものは、留学から帰った後のものである。新しい学問的手法をとりにいれつつも、キリスト教の「正統性」に立つて、一方では新神学に対し、他方では日本の伝統的思想に対するという弁証的なものが主流をしめていた。後半には宗教と社会についての論文がいくつかあるが、村井知至、安部

磯雄、岸本能武太などが社会主義の旗色を鮮明にし、『六合雜誌』に論陣を張ってゆくのに比して、原田助の論文は穩健な啓蒙的なもので、宗教と社会の關係を検討したものである。

この時代の原田の信仰の立場をあらわすものとして『信仰要領(明治三七年)』という小冊子がある。一年の間に三版を重ねたところをみると可成り広く読まれたものと思われる。

そのころ、親しかった横井時雄と共著で『日本の道德と基督教』(警醒社、明治二五年)を刊行している。この中で原田は「国家主義と基督教」(第三章)、「日本従来の道德と基督教」(第四章)の二章を執筆し、横井は「日本人民の德育問題」(第一章)、「忠孝と基督教」(第二章)、「道德修養に於ける社交の勢」(第五章)の三章を担当している。憲法制定、教育勅語発布のあと、キリスト教がわが国の旧来の道德思想に反するという批判にこたえてキリスト教の視点から弁証をしたものである。従来から原田助の著作の中に『耶穌之時代』(明治四〇年)が含まれているが、厳密にいうと、これは訳本であり、原著はドイツの聖

書学者マルチン・サイデル(Martin Seidel)によるもので、原著は独文で、原田は英訳のものから訳出している。イエスの時代的背景を手堅く叙述したものである。

神戸教会の第二期の牧会に携っていたとき、原田助は『基督教世界』の主幹をつとめた。彼の著書『信仰と理想』(警醒社、明治四二年)は、そのころ原田が書き誌した小論、随想をまとめたものである。なかには「祖先崇拜論」「基督教の日本に於ける使命」「日本人の性質と基督教」など今日の課題を扱ったものが含まれている。

同志社の重責を負って

一九〇七年(明治四〇)年、同志社は、神戸教会牧師原田助を同志社社長として迎えた。そのころ同志社は混乱の中にあり、衰退の状況にあった。一八九〇年代後半の同志社は、アメリカン・ボードとの決裂、同志社通則中の綱領の削除と復元、さらに一八九九年の文部省訓令第一二号などにみられる反動期の教育行政への対応などで小崎弘道、横井時雄は相ついで辞任し、そのあとをうけついだ西原清東、片岡健吉、下村孝太郎は何れも暫

時でその任を去り、原田は内外から請われて社長に就任した。『自らの不肖不徳を顧みるに遑あらず、知己の言に感じ敢て天命を信じ其言に従はむのみ。』¹⁴というのが決意であり、十年の命を縮むるの覚悟でその任にあたるようになった。こうして、彼は、一九一九年一月に辞任するまで二年の間、同志社の再建のため全力を尽してあつた。彼は就任して半年後に、「同志社の現状及び将来の希望」という小冊子を出し、同志社の現状を把握し、その課題をあげ、さらにその改善の方策を公表した。それによると、当時同志社には、普通学校に四七〇人、神学校に三五人、専門学校四八人、女学校一七〇人計七二三人の生徒があり、経常の収入は三〇、七三〇円、支払三三、六〇一円で差引二、八七一円の不足金があつた。

同志社の改善策として、原田は先づ同志社が立学の精神を再確認し、新島襄の「大学設立旨意」の実現のため、一致協力してあつたようによびかけた。現在でも同志社は創立記念日に「同志社大学設立の旨意」を抜粋して読んでいるが、それは原田助が社長に就任して始めて迎えた三二回創立記念日（一九〇七年一月二九日）に始まったものである。立学の精神の復興とともに、彼は新島の悲願であつた同志社大学の設立を計画し、その実現のために、校友、教職員が一致共同して大学基本金（五〇万円）の募集運動をおこすことを提唱した。原田のよびかけは、沈滞していた学内外に新しい希望をおこし、とくに校友たちの間には積極的の協力をなす機運が生れてきた。

海外における働き

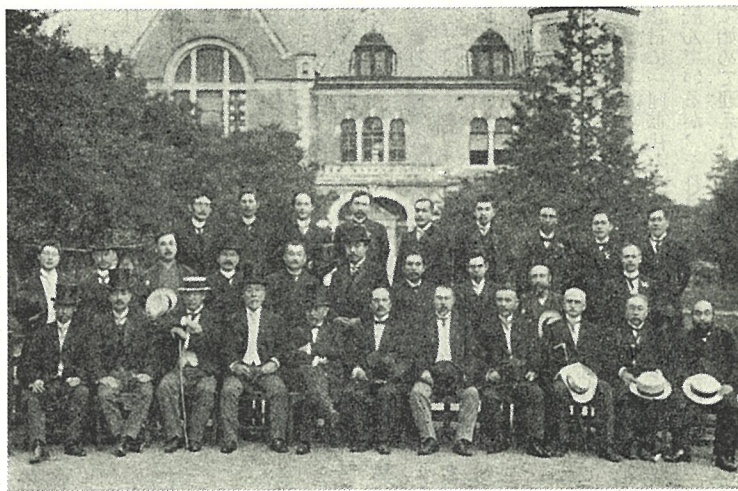
この間、原田助は、かねてから依頼されていたハートフォード神学校においてラムソン講演 (Lanson Lectures) をなし、エディンバラにおける国際宣教会議 (International Missionary Conference) に出席するため、一九一〇年四月から翌年二月まで外国に出張した。往路シベリヤを経てモスクワに赴き、トルストイを訪問し歓談をなし、ベルリンを経てエディンバラに向つた。エディンバラ会議は、今世紀のエキメンカル運動の出発点となつた歴史的な会議で、原田助は、本多庸一、千葉勇五郎とともに日本代表として参加し、二回にわたつて講演をしている。一つ

は、「日本人に訴えるキリスト教の福音とその生活の諸要素」(The aspects of Christian gospel and Christian life that appeal to Japanese)、もう一つは、「キリストの体」(世界の教会)における非キリスト教民族の貢献」(Contribution of non-Christian races to the Body of Christ) というもので、当時きわめて少数であつた第三世界の若い教会の声を代弁するものであつた。この会議に先立って、原田助は、エディンバラ大学からLL・D (法学博士)の名譽学位を受領している。その折りに名譽学位を受けた人びとは、原田助のほか、インドの指導者チャタジー博士、米国のロバート・スペンサー博士、カンタバリー大僧正、セス・ロー元コロンビア大学総長、それにジョン・R・モット議長など錚々たる人びとであつた。

ハートフォード神学校におけるラムソン講演は、二年前に依頼されたもので、原田助は八回にわたつて「日本の信仰」(The Faith of Japan)と題して講演した。八回目の講演を終えて、彼はこう記している。

今夕は無事に八回の講演を終え実に重荷を卸せし心地す。自ら講演の不十分なるを

感するも、諸方より好評を耳にするは稍々
心を慰するに足れり^⑦



1912(明治45)年5月20日、同志社大学開校式記念

前列左から1人目 田所文部省学務局長、徳富猪一郎氏、大森京都府知事、長谷場文部大臣、
本人、菊池大麓男、久原京都大学総長、グリーン博士、小崎牧師、宮川牧師

なお、この講演は一冊の英文の書物となつて、マックミラン社から一九一四年に出版され、さらに一九二六年に版を重ねており、日本の宗教理解に寄与している。^⑧

かつては学んだ国であるといえ、言語習慣のちがう異国で八回にわたる講演を外国語でなすということは並大抵の労苦と準備がいるものである。ハートフォードから一九一〇年九月二二日付に原田助が妻佐喜子に宛てた書簡は、準備の苦心を伝えている。

一昨年来夢寝にも忘れられなかった当校の講演も遂に本日より開始午後四時半開会マッケンジー博士の紹介にて本日序論日本宗教概説を無事演了す。聴衆は学校の職員学生外に男女聴衆をも併せて百名

足らずと覚え候。(中略)講演の準備に付ては随分骨折り候、米国着以来就中最後の

一ヶ月に八回の講演を起草したる訳にて日八、九時間働き申候、最後の二週間は昼食をパンと水にて済ました位にて一ヶ月内に約半年の仕事を上げたりと云ふも差支なく、幸にして鈴木吉満氏非常に助力せられ是れこそ夫の賜物にて御座候、時には期日迄に間に合ふやと心配致し夜中目醒めて睡られざりしこともあり^⑨

この講演の前後彼は、アーモスト大学からD・D・(神学博士)の名譽学位をうけ、イエール大学、ハーバード大学、アーモスト大学、シカゴ大学などで講演をしている。なお帰途ニューヨークにおいて、ロックフェラー財団とジェームス財団を訪問し、同志社への募金を依頼しているが、ロックフェラー財団ではことわられ、ジェームス財団では、とりあえず五千ドルの寄附をうけた。なお、一九一一年八月一七日にジェームス夫人から電報があり同志社に十萬ドルの寄附をするという通知があった。これは、このときの原田の訪問が実を結んだものであった。

交通の便が現在とは比較にならぬほど不便な当時においては、外国は遙に遠い国であった。使命を帯びて外国に赴く場合も「外遊」

といわれ、異国に閉日を楽しむ様にうけとられがちであった。さきにあげた原田の海外渡航は重要な使命を覚びた旅であった。その上、大学設立の課題をかかえていた故に、出立の当初から「海外旅行中若し母校の爲め何もの爲す能はざれば余は同志社を辞すべし」との決意を表明しての旅立ちであった。

大学の設立と苦悩

帰国後大学設立基金募金のため東奔西走の努力をなし、ついに一九一二年五月に同志社大学の開校式を盛大に挙行するに至った。原田助の下に、同志社は飛躍的進展をとげた。

いま原田の就任前の一九〇六年と九年後の統計を比較すると、学生数においては、一九〇六年に四九二名であったものが、一九一五年には、一、五四九名、約三倍となり、学校経費は、二八、三二二円から八九、三四四円、約3.2倍となり、財産も三六六、〇八二円から、一、一五七、〇四四円、約3.1倍となるなど、その規模は格段と大きくなった。また、内外の学識者が大学や同志社の諸学校で講演をなし活況を呈したかにみえたが、急成長のかけには、それなりにおさえられていた軌轢があら

り、一九一七年から翌年にわたる粉擾をみるに至った。

従来から同志社の主流を占めていた中学・普通学校の人びとは、同志社が大きくなるにつれて、キリスト教による徳育を根幹とする立学の精神が稀薄になることを憂い、校長を兼務している社長は、各学校の教育担当者と接触し、校外の仕事をひかえて、学生、生徒の徳育教育に力をそぐべきであると主張した。

一方大学は形だけは大学として開校したものの専任教授の数やその待遇、専攻学科、図書設備などにおいて不十分であった。一九一四年には学生たちがストライキをもって問題の提起を行った。その背後には、大学の研究設備の充実のみでなく、大学における学問研究の自由の確保を求める大学教員の主張があった。

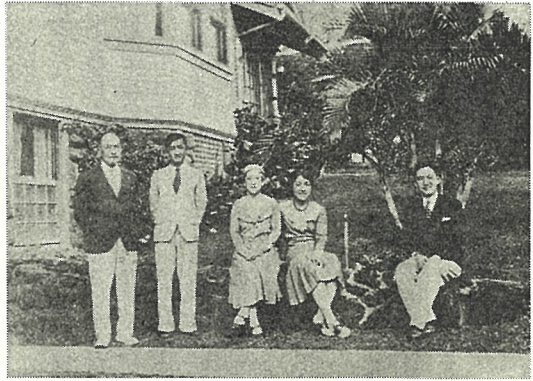
他方、校友たちは、当初は、原田の大学開校を積極的に支援して来たが、大学が発足するにつれて、学問の独立、研究の自由の主張がなされる反面に、同志社の立学の精神が形骸化され、長年同志社の教育に尽力して来た人びとが学園を去ってゆくのをみて、原田社

長の統率力を批判するに至った。

原田助の日記をみると、外遊から帰って来て間もなく、すでに彼の悶々たる苦悩を記している。

四月二十日（一九一一年）

苦悶々々、何人か之を知る。予が健康も精神も到底永続すべくもあらず。解決の途は飽くまで消極か。又は積極的に大に発展せんとするか二途にあるのみ。試みに思へば同志社に於ける、普通学校のみにて優に一人前の仕事なり。之に加わるに神学校及び専門学校のあるあり、又女学校も予が監督を離るべからず。而かも事務に關しては椅子の新調、庭木の植替え、増俸要求、公債価格の上下に至るまで相談を受けざるべからず。更に最近起れる募金運動、学校発展策のみにても、予が全力を尽して尚は足らざるにあらずや。他而絶えず精神的指導者として講壇の人たらざるべからず。斯くて仮令予が健康は続くとしても、予は精神上遂に衰頹の人とならむか。嗚呼苦悶々々。幸にして予は愛の神を忘るる能はず。予が同情の親友あることを忘るる能はず。予は更に積極的に大開展の途を講ぜらるべ



1931(昭和6)年、家族と共に(於ハワイ)

からず。^②

行間にみられる原田の苦悶の姿を察することが出来る。原田は消極的になって一步退かずむしろ積極的に前進していった。同志社の多岐にわたる諸学校の運営は、一人の指導者によって兼務出来ない程の広がりをもっていた。そこには、急激に増大した組織の制度的矛盾があった。それは、単なる善意や個人的

努力では乗り越えることの難しい課題であった。

一九一八年一〇月、寄附行為の改正の結果理事会において選挙が行われて、原田助は総長に就任したが、先述の三者三様の主張の対立は、収拾しがたい紛擾となり、彼は三ヶ月のち辞任するに及んだ。辞任にあたって、彼は自らの不明不徳を謝し、責を一身に負って一切の弁解がましい言辭をのべなかった。

『同志社時報』(一六一号)は「非難に対し従容たる総長の態度は君子をあざむかず」とのべ送別の言葉とした。^③

ハワイにおける働き

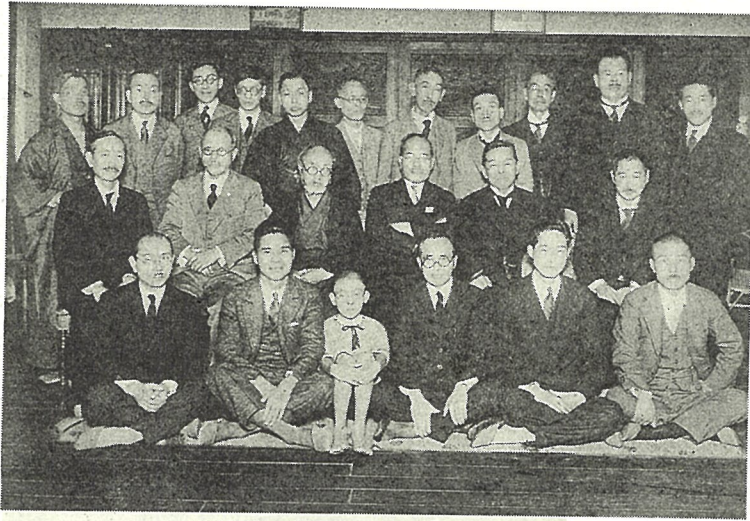
同志社を去った原田助は、一九一九(大正八)年五月から翌年五月まで、一年間、海外に講演旅行に赴いた。帰途ハワイに寄ったおり、ハワイ伝道百年記念会に出席し、ハワイ大学のデイン総長と出会い、それが縁となつて一九二〇年八月ハワイ大学に招かれるようになった。当時ハワイ大学は単科大学から総合大学に移行し、東洋部を設けたときで、原田助はその初代の教授として招聘された。彼は、一九三二年九月、健康の都合で辞任する

まで一二年にわたってハワイ大学の東洋研究の発展に顕著な貢献をした。

一九二〇年、原田助がハワイ大学に赴任したときは、日本語ならびに日本史の担当教授として、初級日本語、中級日本語、そして日本文学の三コースを担当した。一九二三年には、その他に二つのコース、上級日本語と、日本文学の上級コースを開講した。その上、同年から大学の歴史学科の一員となり、日本史の講義を担当し、さらに、一九二七年からは、東洋宗敎史のコースを開講した。これらを一人で担当するということは容易なことではなかった。彼がいかに精力的に活動したかを察することが出来る。一九三一年に、大学はその必要を認め、国本讓二を日本研究部門の教員として採用し、日本語のコースを担当することになった。そこで原田は、日本文学、日本文学古典研究演習、日本近代史、東洋宗敎史の課目を担当している。原田助はこれらの働きを通して、ハワイ大学における日本研究の基礎を築くための重要な貢献をなした。

一九二八年から一九四〇年にわたってハワイ大学の学生たちがフレンド平和奨学金のフェローとして同志社で一年ないし二年の研究

をなし、一九三〇年には、同志社大学の学生が四名がハワイに来て親善弁論大学に出席す



1929(昭和4)年、原田助歓迎会(中瀬古邸にて)

前列左から1人目 片桐哲、2人目 松井七郎、5人目 難波紋吉、中列左から1人目 三輪源造、2人目 堀貞一、3人目 柏木義内、4人目 原田助、6人目 加藤延年、後列左から1人目 中瀬古六郎、3人目 田中良一、8人目 本宮弥兵衛

るなどハワイ大学と同志社大学はきわめて親密な交流プログラムをもった。その背後には

原田助の存在があったことを忘れてはならない。こうした原田の働きの中から阪巻駿三、篠田稔などのハワイ大学の日本研究を担当する新進の学徒が生れ、彼らが原田の後を継いで日本研究を推進していったのである。

原田助は、ハワイ大学における教育、研究のほかに、太平洋関係研究所(The Institute of Pacific Relations)のメンバーとして、一九二五年、一九二七年および一九二九年の会議に出席し貢献をしている。一九二七年の会議では「ハワイにおける日本人の地位―二世の直面する課題」について、一九二九年の会議には、「日本人の性格とキリスト

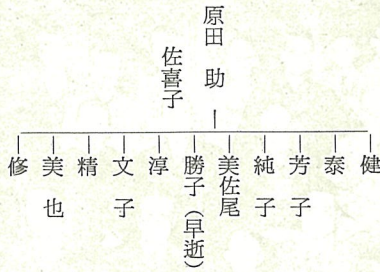
教―日本人の倫理的性格とキリスト教の教説との比較」について論文を発表している。

一九三二年九月、原田助は健康の都合でハワイ大学を辞任することになった。原田のハワイ大学における貢献を憶えハワイ大学は彼にLL.D(法学博士)の名譽学位をおくると共に、名譽教授に推挙した。おそらく、原田助は米国の大学で専任の教授として二年の長きにわたって教鞭をとった最初の同志社人であり、かつまた日米の教育、文化の交流に顕著な働きをした日本人であった。

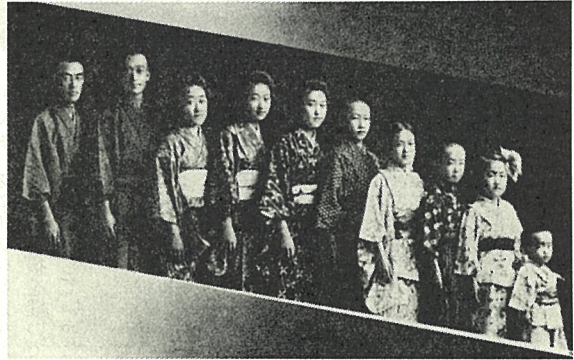
家庭と晩年

原田助は妻佐喜子との間に五男六女を与えられた。佐喜子は一八七二(明治五)年、兵庫県三田に生れ、父川本泰年は三田藩の藩医であり、母操は、一八七六(明治九)年に神戸教会で受洗、彼女も幼時洗礼をうけ、一八八六年に神戸教会で信仰告白をなした。多事多端をきわめた夫君を助け、子女の養育をなし、多くの人びとに感化を与えた。子女たちはそれぞれの場にあつて両親の精神を継承した。長男健(一八九二年―一九七三年)は、同志社普通学校を卒え、三高、東大に学び、

初代ヴァチカン公使、駐伊大使、宮内庁式部官長などをつとめ、一九七一年には、同志社大学から文化博士の名譽学位をうけた。先述のように長女芳子は、同志社大学神学部教授ならびに同志社女子大学長などをつとめた片桐哲の夫人である。



一九三二年、ハワイより帰って、京都上加茂に居をおき、余生を送った。一九三四(昭和九)年、古稀を記念して同志社の関係者は古稀記念会を開き、東京の岡精一画伯の制作した肖像画を贈り、祝意を表した。一九四〇(昭和十五年)二月二日永眠。享年七七歳であった。同志社は、二月二五日、栄光館にお



1916(大正5)年夏、四男五女
左から健、泰、芳子、純子、美佐尾、淳、文子、精、美也、修

いて、社葬として葬儀を行った。創立者新島襄の悲願であった同志社大学の設立を成就した原田助の功績を同志人は忘れ得ないであろう。また、ますます国際化してゆく時代において、同志社の生んだ最もすぐれた国際人の一人として、その先駆的な働きをわれわれは永く記念することであろう。

- ①『信仰三十年基督者列伝』、警醒社、大正一〇年、四四頁、以下、『列伝』
- ②原田健編、『原田助遺集』昭和四六年、二四頁、以下『遺集』
- ③安部磯雄『社会主義者となるまで』改造社、昭和七年、一一二頁以下、岸本能武太については、同志社大学人文科学研究所編、『六合雑誌の研究』教文館、一九八四年、二七九頁
- ④原田助『信仰と理想』警醒社、明治四二年、九〇頁—九一頁
- ⑤同右書
- ⑥『遺集』、三五一頁
- ⑦『列伝』四四頁
- ⑧『遺集』、九頁
- ⑨『遺集』、二三頁
- ⑩同右書、五三七頁
- ⑪『番町教会百年史』一九八六年、三八頁
- ⑫『平安教会百年史』、一九七六年、四八頁—五二頁
- ⑬『遺集』一四七頁
- ⑭同右書一五五頁
- ⑮原田助『同志社の現状及び将来の希望』、一九〇七年
- ⑯『遺集』一六八頁
- ⑰『遺集』一八一頁
- ⑱Tasuku Harada, The Faith of Japan, The Macmillan, 1914, p 190
- ⑲『遺集』、二九五頁
- ⑳『同志社百年史』、第一巻、七六七頁
- ㉑『遺集』、一八七頁
- ㉒『同志社百年史』、七八一頁

●竹中正夫「同志社とハワイ」『同志社アメリカ研究』
第三号、一九八六年

●Tasaku Harada, "The Social Status of the Japanese in Hawaii—Some of the Problems Confronting the Second Generation" Institute of Pacific Relations, 2nd Conference, Honolulu, 1927, data paper, 13p.

●Tasaku Harada, "Japanese Character and Christianity—A Study of Japanese Ethical Ideals as Compared with Teaching of Christianity" *Pacific Affairs* 12: 683-698, Nov. 1929

Tasaku Harada, "A Study of text-books on history and geography used in the secondary schools of Japan, Institute of Pacific Relations, 2nd Conference 1927, data paper, 37p.

●原田和敬子編『原田健遺集』昭和四九年
(大学神学部教授)

同志社校地出土の埋蔵文化財⑫

鈴木 重治

泥像仏頭断片（鎌倉時代以前）



同志社中学校体育館地点
Ⅱ区・S.K. 3031 出土
残存高 3.5 ㎝

同志社中学校の体育館地点は、古く相国寺境内の西南部に当たっていた。発掘調査によって確認された南北に長い溝が、築地堀に沿う側溝である。この溝の東側、つまり旧相国寺の境内には大、小の廃棄坑が検出されていて、出土資料によって室町時代、安土・桃山時代などの遺構が区別された。これらの中には、地山を掘り込んだものもあったが、奈良時代の整地層の一部と考えられた土層を掘り込んだものもみられた。

第三遺構検出面で出土したS K 三〇三二もその一つである。

S K 三〇三一からは、奈良時代の須恵器のほか、鎌倉時代の土師器も出土している。相国寺の創建以前のものばかりである。この中に含まれていたのが写真に示した仏頭の断片である。

光背の一部も残す頭部片は、いわゆる泥像であって、型造り後に部分的な彫りやナデ整形によって優美な形態に整えていて、その胎土は、良質の土師質粘土が使用されている。伏見人形などの江戸時代の土人形と違って、型造りであってもキララなどの剝離材を使用しないばかりか、白釉、緑泥、褐釉、赤色顔料などの表面装飾のない素朴な泥像である。豊かな肉付に加え、眉から鼻にかけてのシンメトリカルな弧線、器面が荒れているとはいえ、よく残存している長目の耳などに古い様相をしのばせている。伴出の資料の中には鎌倉時代のものも含まれているが、泥像仏自体は、奈良時代までさかのぼる可能性がある。

(同志社大学校地学術調査委員会調査主任)